九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会的ひきこもり者の家族を対象とした支援モデル作成に向けた臨床心理学的研究

久保，浩明

https://hdl.handle.net/2324/4784380

出版情報：九州大学，2021，博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（様式８）

氏　　名　：久保　浩明

論文題名　：社会的ひきこもり者の家族を対象とした支援モデル作成に向けた臨床心理学的研究

区　　分　：甲

博　士　論　文　の　要　約

本研究の目的は，社会的ひきこもり(以下，ひきこもり)の家族支援としてメンタルヘルス・ファーストエイド(Mental Health First Aid: MHFA)およびコミュニティ強化と家族訓練(Community Reinforcement and Family Training: CRAFT)に基づく家族介入プログラムの開発を通じて，ひきこもり者の家族支援手法の確立に向けた家族支援モデルを提示することであった。

第 1 章ではひきこもり支援を概観した。ひきこもり事例では家族支援の重要性が高く，家族の困難感を整理したところ家族の高い心理的負担，家族機能および家族関係の課題，スティグマが見出された。これらの困難感に対する家族支援のシステマティックレビューを実施した結果，支援の一定の有効性が認められたが，スティグマへの介入は十分に検討されず，包括的な家族支援が求められると考えられた。

第 2 章では本研究の目的を提示した。本研究ではスティグマの低減に有効性が示されている MHFA およびひきこもり者の家族支援に一定の有効性が示されている CRAFT に基づく集団形式の家族介入プログラムを開発し，家族の困難感に対する包括的な支援の有効性と課題を検証することで，ひきこもり者の家族支援モデルを実証的に構築することとした。

第 3 章では研究 1 から研究 3 を通じて家族プログラムを開発した。研究 1 では全 5 回のセッションから構成される 5 回版プログラムを開発した。21 名の家族にプログラムを実施した結果，MHFA の対応スキルとスティグマが改善したが，対応する自信は変化しなかった。家族のストレス反応は短期的改善が示唆された。また，ひきこもり者 16 名のうち 9 名(56.25%)が外出の増加等の行動変化を示し，このうち 3 名(18.75%)が専門家支援の利用や就職活動等の社会参加に関連する行動を示した。

研究 2 では 5 回版プログラムと同内容を 1 日で実施する 1 日版プログラムを 5 名の家族に実施したが，MHFA の対応スキルやスティグマは改善せず，対応する自信が低下した。他方で家族のメンタルヘルスは改善した。ひきこもり者 4 名のうち 3 名(75.00%)に行動変化がみられたが，社会参加はみられなかった。

研究 1 および研究 2 から参加者の多様性が示唆され，研究 3 では多様な状況に応じて家族が段階的に関わるスモールステップアプローチを導入し，全 3 回のセッションから成る 3 回版プログラムへと改訂した。23 名の家族に実施した結果，MHFA の対応スキルが短期的に向上したが，スティグマは変化せず，対応する自信は低下した。家族のメンタルヘルスは短期的に改善した。ひきこもり者 20 名のうち 14 名(70.00%)に行動変化がみられ，このうち 6 名(30.00%)が社会参加に関連する行動を示した。他方で 2 名(10.00%)の問題行動が増加した。3 回版プログラムのひきこもり者の行動変化率は 5 回版プログラムと同等以上であり，有用な家族支援の選択肢になると考えられる。ま

た，スモールステップアプローチの有効性が示唆されたが，第 3 章を通じてプログラム後の家族の変化とひきこもり者の行動変化との関連を十分に検討できなかったと考えられる。

そこで，第 4 章ではひきこもり者の家族支援モデル作成に向けた示唆を得るために，ひきこもり者の行動変化の要因を量的および質的手法を用いて探索的に検討した。研究 4 では全参加家族の自記式調査票を用いてロジスティック回帰分析を実施した。その結果，家族のメンタルヘルスの改善とひきこもり者の日常生活行動の積み重ねがひきこもり者の行動変化に影響することが見出された。また，ひきこもり者に関わる困難感や葛藤に家族が向き合うことが変化をもたらす可能性が示唆された。

研究 5 では全参加家族の自由記述を用いてテキストマイニングを実施した結果，傾聴といったひきこもり者本人のペースを受容する関わりの有用性が見出された。また，専門家支援を促す関わりは個別支援の中で実施すること，支援の様々な段階で家族支援を継続する重要性，家族自身のセルフヘルプが家族支援に求められることを論じた。

研究 6 では 7 例の事例報告を通じて家族の変化のプロセスを検討した。その結果，ひきこもり者本人のペースを受容する関わりの有用性が改めて支持され，こうした関わりがひきこもり者と家族が話し合える関係性につながる可能性が見出された。また，スティグマの問題に対して，MHFA に基づく関わりの有効性が確認された。さらに，ひきこもり者への関わりを阻害する家族自身の不安等の課題についても検討し，こうした課題を有する家族は回数が限定される集団形式の支援ではなく，集団形式の支援と個別支援とを組み合わせた支援が有用である可能性を議論した。

第 5 章では研究 1 から研究 6 を通じた総合考察を行い，ひきこもり者の家族支援モデルを提示した。本研究の支援モデルではセルフヘルプによって家族が関わる余裕を得たうえで，ひきこもり者本人のペースを受容する関わりや家族の日常生活の関わりを積み重ね，家族関係を改善する支援を集団的支援の構造で実施し，専門家支援の利用を個別支援の中で検討する家族支援の手法を実証的に提示した。